

# コープふくしま大震災ニュース

## がんばっぺ編 17

2011年5月2日  
コープふくしまで  
取材したジャーナリ  
スト桐生作成

### 終息しない原発事故、たまるストレス

コープふくしまの共同購入を利用している神戸清子さんのお宅は南相馬市の鹿島区にあり、近くの川に津波が押し寄せたが家に被害はなかったといいます。福島第一原発からは30km圏外ですが、放射能のために自主的に避難を勧める放送があったといいます。

地震後、5日間ほどは避難しましたが、高齢な母親の世話を考えて、その後は自宅にとどまっています。なかなか原発事故収束の見通しがたたない中で、隣近所は避難のストレスで疲れ、自宅に戻る方々が日が続つにつれてふえているといいます。津波の被害を受けた近隣の商店からはほとんど買い物ができず、生活をつないだのは災害支援の配給だったといいます。そんななかで「3月末にコープふくしまから配達再開の知らせがあったことはたいへん嬉しかった。家は無事で生活必需品は揃っていますが、配達のリ開を聞いて本当に安心した」と神戸さんは喜んでいました。

### 安全から避難へ、天地がひっくり返るような発表

共同購入を利用していた飯館村に住む和田文枝さんは、外に出ないよう勧められていたが「犬は人と違って散歩させなければだめなんです」と言い、雪が降っても散歩を欠かさないそうです。というのも、これまで放射能に関するPTAなどで行われた講演では、原子力安全・保安員の方が来てニコニコして「安全です」と言っていたからだといいます。ところが、「4月11日の説明会では、放射能のレベルが高いから計画的避難地域に指定されるかもしれない、といわれたんです。天地がひっくり返るような発表で、憤りすら感じていました」と怒っていました。22日に政府は、この地域を含む飯館村を計画的避難区域としました。これで和田さんたちは5月末までに避難せざるをえなくなり厳しい生活を余儀なくされることになりそうです。（以上の記事は4月19日のインタビューです）



神戸清子さん



和田文枝さん

## 情報を公開し子供を守る指針を示して欲しい

郡山市の小学校の校庭で基準値を上回る放射能が観測されています。11日から新学期開始の案内メールには、「確かな安全対策の方針が示されておらず、このまま新学期が始まることに戸惑いを感じた」と、小学5年生と幼稚園年中の子どもを持つコープふくしまの組合員さんは困惑しています。マスクと帽子、肌の露出の少ない服で集団登下校を学校は勧めていますが、マスクをしていない子供もいて親の判断に任されています。「学校は子どもが校庭に出ることを制限し、屋内活動をしますと言うだけで、どの程度の汚染なのか連絡はありません。市のホームページやニュースで汚染レベルや校庭の土を取ることを知りました。ところが、学校からは子供を守る指針などの連絡がないのが不安です」。

一方、次男が通う私立幼稚園では、園長が放射線測定器を買って数値を保護者に知らせ、屋外行事を変更するなど、対策の指針を示したので安心だといいます。これに反し、小学校では子供の安全は自分たちで守らなければならない状況で、そのためには「放射能の観測数値を教えてくださいなど判断材料が欲しい」と言います。組合員理事の日野公代さんは「放射能レベルを発表している学校もあります。一方では『メーターが振り切れた』という噂が広がって冷静さを失う悪循環も起きています。これは数字を公表するなどきちんとした態度を取れない大人の問題です」と指摘していました。



レベルの高い校庭の表土を集めた小学校



日野公代さん

## 国の安全指針に不安を感じる福島市の組合員さん

コープふくしまの組合員活動でリーダーも務める大堀希さんは、二人の子供を公園で遊ばせたくなさうと言っています。確かに大堀さんの住む福島市内の公園には「放射線量が～基準値を上回ったため～」利用は1日1時間程度として下さいなどと記した看板があります。

「年間の累積線量が20mSv以上になる恐れのある地域が計画的避難区域とされ、幼稚園の園庭で同様に20mSv以下なら安全という国の指針に不安を感じる」と大堀さんは言います。今でも洗濯物は室内で干し、換気にも気をつけている。しかし、「これから暑くなるのでどうしたらいいか」と顔を曇らせます。外に出られないので4歳の長男は怒りっぽくなり、2歳の次男は離れるとすぐ泣くなど情緒は不安定です」とも言います。「校庭や園庭などの土壌を入れ替えるなりして、子どもたちが少しでも外に出られる環境をつくって欲しいというのが私達の願いです」。誰も

経験したことのない事故なので、「少し大げさでもいいから私達の不安を払拭する具体的な施策を国は示して欲しい。汚染レベルは地域で異なるので、それに合った目標と方向性を示して欲しい」。そして、「私達は普通の生活をしたいのです。きれいな空気の中で散歩する、そんな環境で子どもたちを生活させてあげたいのです」と大堀さんは言います（28日の取材）。



公園利用が制限されたが29日の調査で基準値以下になった

大堀希さん

## コープふくしまと共に風評被害を乗り越えたいと望む漁業者



たくさんの漁船が打ち上げられている南相馬の田園地帯

津波による甚大な被害を受けた東北の宮城県、岩手県と違って「福島県だけが原発事故という問題を抱えている」と相馬双葉漁業協同組合、相馬原釜支所総合対策室長の寺島英明さんはいいます。津波の被害について、「相馬、双葉、原釜の3漁協の漁船の維持率は80%以上で、すぐにも漁に出られる状態にあります」と寺島さん。地震のあと湾の水が引いて津波警報が出ると、漁師たちは一斉に船を沖に向けて走らせ船を守ったからです。しかし、多くの漁師が家や家族を失い、町はなくなり寺島さんも奥さんを失いました。

「今、漁師は避難所にいて船は港にあるので、体勢を立て直して7月1日から漁を再開したい。その時の最大の問題は放射能と魚を売る市場がないことです」。漁船や港のハード部分は復興が進むが、魚を買う人など販売を含めたソフトの復興の目処が全く立たないといいます。活魚を扱う仲買人はトラックから店、人まで失っています。しかし、寺島さんは「3月11日を境に社会は全く変わりました。（仲買を介さず）生産者が自分の生産品に値段を付けられるような仕組みにして共同出荷する方法を考えています。そのために沿岸の漁協でネットワークを作る相談を始めました。また、コープふくしまなどの生協さんと漁協と一緒に販売を立て直す方法も考えたい」と言います。

一方で「7月に船を出しても魚から放射能が出たらどうするんだ」という声もあるといいます。これまで宮城県の3カ所まで調査をしても魚に異常はなく、「いわき市の四倉沖の水深30～50mのヒラメも問題ありませんでした。基準以上の放射能が出たらそれはしょうがないとして、とりあえずは7月に政府の安全宣言が出たら操業開始です。百数十隻の船を出します。ただし、「魚に異常がないからといっても売れないことはわかっています。ですから、『大丈夫ですか』という心配する風評を乗り越えるためにも、消費者の方々に安全でおいしい福島県沿岸産の魚を食べさせてあげたいんです」と寺島さんは熱く語る。そのためにはコープふくしまと協力して無償のお魚定食を提供するなどの催事を行って、「とりあえずは県内の方々に食べていただいて安全を確かめてもらい、風評被害を一つ一つ克服したい」と言います。



寺島英明さん



漁協の仮事務所

## いつものようにモモの栽培を続けるという農家

モモ（桃）の一大産地である伊達市梁川町周辺の果樹園では27日にモモの花が満開となりました。同町でモモの生産に携わる佐久間一郎さん（JA伊達みらいモモ生産部会梁川支部役員）は、「いつものようにモモの栽培をして欲しいとJAさんから言われています。やれることはしておけということで、やる気になって手入れに取り組んでいます」と言います。この産地では、殺虫剤などの農薬散布の回数を減らす減農薬栽培を取り入れ、贈答用の高級品の生産で有名です。

それだけに風評被害が気になるといいますが「放射能のことは心配しても仕方ありません。今年、手をかけて世話をしないと次の年にいいモモができなくなるなど悪い影響が出るので栽培

作業を続けなければなりません。少し出遅れた感もありますが、今は摘花や受粉の作業シーズンです」と言います。

放射能に関しては、誤った対応をしないよう国や県の指示で動いていると農協の担当者は言います。消費者が安心できる適切な検査を行政がしっかり実施して、安全宣言を国に出してもらおう働きかけていくと言います。農協が集荷する生産品の検査は「公的な機関で行われるので安心できる」という評価を大きな果物販売チェーンの経営者からいただいていると言っていました。



桃の摘花作業をする佐久間一郎さん

## 計画的避難区域の決定に「納得がいかない」という農家

飯館村松塚地区で花と野菜を有機農法で育てている高橋日出夫さんの農場も、計画的避難区域に指定されました。夏から秋にかけて約7万本の「トルコギキョウ（トルコ桔梗）」と、ブロッコリーなどをハウス栽培し出荷してきた高橋さんは「原発事故でハウス栽培の小松菜が出荷停止となったが保管しなくてはならないので”菜の花畑”になっています」と言ってハウスを案内してくれました。ブロッコリーの作付けも断念し、トルコギキョウは「飯館の花として出荷しても悪いイメージを与える」ので栽培を取りやめたといいます。自家消費用の野菜畑の放射能レベルは3~4マイクロシーベルト(時)前後あり、避難となると手入れができなくなるので村全体で作らないと申し合わせたそうです。

家も農地も耕作機械も捨てて、身の回り品だけを持って避難しなければならないことに「納得がいかない」と奥さんは唇を噛んで言います。4月10日にあった学者の講演では「今の放射能の値では健康に害はない、と言っていたのが11日には計画的避難が発表され、22日に計画的避難区域に決定されたんです」大きく変わる発表に「どう考えても納得がいかない」と言います。高橋さ

んも「有機産直グループの活動を盛り上げ、安心安全な野菜作りの技術を花の栽培に応用しやっ  
と軌道に乗ってきたところでした。消費者の皆さんに喜んでもらえるおいしい作物を栽培してき  
たのに、本当に悔しい」と話していました。



避難を前に耕作を断念した畑に立つ高橋さん夫妻



農耕機具をおいていかなければならないと悔しがら高橋日出夫さん